

100周年記念資料

8. 樹芸研究所（の思い出）

郷 正 士

1963年2月1日より1984年3月31日まで20余年間樹芸研究所に勤務しました。それまでは東京大学の林学教室で10数年、木のタネを主として研究していました。樹芸研究所に勤務することになりましたが、樹芸についての知識はほとんどありませんでした。そこで佐藤敬二先生の樹芸学の講義ノートを読み返しました。しかしいざ樹芸研究所での研究テーマに何を取り上げれば良いのか皆目見当が付きません。それで国立林業試験場の特用樹木に詳しい倉田益二郎先生を訪ねてご意見を伺いました。先生は言下に「モリシマ」だろうとおっしゃいました。当時は合成して造られたものが天然のものにとって変わる風潮がありましたが、タンニンの合成は当分できないだろうと考えられました。そして赴任しました。

I. 経 営

樹芸研究所には経営案が無かったので、経営案を作らねばならないことになり、石川主任に40年伐期、年5ha造林の案を作って貰いました。当時はまだ製炭事業が盛んに行われており、毎年7haぐらい払い下げておりましたので、5haの造林は可能と考えました。ところが数年経つと製炭者が急減して1~2haしか払い下げができなくなり、今後も増える見透しがたたないため、経営案の改定が必要と考え、林長会議に提案したところ、もう改定を必要とするような案を作ったのかと皆に笑われました。

5ha造林するにも林道が必要と考え、会議に提案しましたが、林道は秩父演習林重点の時で、とても樹芸研究所のような収入のあがらない山では駄目だとのことでした。そこで千葉演習林にお願いした結果、渡辺林長が協力してくれることになりました。そして千葉演習林が小型のブルドーザとオペレータを派遣してくれた結果、2年がかりで山下に幅3mの作業道を作ることができました。このとき予算が少なくて道の半分を北斜面に作ったのは失敗でした。

着任早々、樹芸研究所の面積は青野作業所、加納事務所とも実測面積が公図面積より約1割少ないと説明されて驚きました。通常逆の場合が多いと思われるので、一度境界を歩いてみることにしました。朝の8時から歩きだし、昼食は立ったまま、それでも午後5時にやっと青野作業所に帰ってきました。面積が不足するのは樹芸研究所だけではないようで、隣接地の方が当方の管内に杭を打ってあるところがありました。境界杭はほぼ妥当と思われました。その後、研究所にもなれましたのでもう一度一周しましたが、測量面積は間違いのないと思ったので研究部に訂正したいと申し込みましたが、面積が少なくなるのは面倒なので今すこし待つように言われました。

その後毎年伐採して造林するとこの造林面積は正確に行われるため、残りの面積が少なくなるとこの約1割減の割合が相対的に大きくなって困ってしまいました。そのため再三頼んでやっと実行していただくことになったとき、職員組合との交渉に時間を割かれ、また樹芸研究所も職員数の減少のため、とても手が回らなくなってそのまま定年を迎えてしまいました。なおI林班のクスノキ林に沿って登ったところの境界杭が引き抜かれて割られていましたので、今もそのままになっているならば善処していただきたい。

II. 研 究

アカシア・モリシマを研究することにして、これまでの国内の研究報告に目を通したところ、一番の問題点は寒さに弱くマイナス5℃以下になると枯れることが判りました。アカシア・デアルバータ、アカシア・デクレンスなどがアカシア・モリシマより多少寒さに強いと言われていすので、交雑によってより寒さに強いアカシアを作ることを計画しました。また更に寒さに強いアカシアはないかとアカシア属のタネを120種以上集めて播種、養苗して植え付けを行いました。しかし10数種以外は成木しませんでした。この成木した樹種も成長がこれまでにすでに導入されていたアカシア属の樹種に比べてみると見劣りがして実用になりませんでした。

アカシア・モリシマ、アカシア・デアルバータ、アカシア・デクレンスのそれぞれの交配は多大の経費と人手を費やして10年近く実行しましたが、結局目的に合致した交雑種を作ることができませんでした。南アフリカのアカシア研究所では早くから交雑種の研究をしていましたが得られた交雑種が優れているかどうか職中に読んだ文献では明らかではありませんでした。

なお、交配のための足場に使うパイプを毎年買い増していたことに対して、事務の方から文句を言われたことは心外でした。

今後アカシアの研究を続けるか他の樹種に変えようかと迷っているとき、農業生物学科の村田先生からエネルギー特別研究に加わらないかとのお誘いがありました。これは先生が研究所にみえられ、温室を案内したときミドリサングがガソリンの代用になるとアメリカのカルビン先生が力説していると、説明したのを覚えておられたからでした。それで早速研究班に加えていただき、ミドリサングの研究を始めましたが、伊豆地方では成長があまり良くなく、露地では冬を越さない。沖縄に視察に行つてその樹勢の良いのに驚き、これでは当地では基礎研究しかできないことを痛切に感じました。これまでミドリサングの研究は日本ではほとんど行われていないと考えていたので、成果報告を書きました。その後大正時代の台湾総督府林試の報告にミドリサングの成分を始め非常に詳しい報告が出ていたことを知り不勉強を恥じました。

私達によるミドリサングの研究できる限界がみえたとき、同エネルギー研究班の北海道大学の西村先生からユーカリの樹種の中にはアオサングよりさらにガソリン代用として良い樹種があるから実行面を受け持って欲しいと依頼されました。ユーカリ属は前々から興味を持っていまし

た。それは1964年にイタリアの国立林業試験場に訪れたとき、産地間の比較試験を始め、試験場のかなりの部局がユーカリの研究をしているのを見て、アカシアより有利かも知れないと考えていました。しかし、1950年代に月本氏によってユーカリブームが起こり、その後日本での造林に失敗したことが頭から離れなかったので採り上げることをちゅうちょしていました。西村先生から話のあった時点でユーカリに重点を変えようと決心しました。このユーカリ属も100種以上の種子を入手しましたが、ガソリンの代用にするためにはとても採算が合わないことが判りました。しかし、ユーカリ属にはいろいろの成分を含む樹種があるので、それぞれの樹種について研究すればアカシア属より有望かも知れないと考えています。

在職中に実行できなくて残念に思っていることはいろいろありますが、その中でも台湾キハダ (*Phellodendron Wilsonii Hayata et kanehira*) を導入できなかったことです。いろいろ手をつくし、先方が送ってくると約束してくれても結局入手できませんでした。日本のキハダよりベルベリンの含有量が多いと言われていいますので一度栽培してみたかった。

樹芸研究所の樹芸とは何か、源泉付の温室は何のためにあるかを考えてみる必要があると思います。樹芸とは何かと尋ねられて答えられる林業関係者はあまり多くないと思います。そんな言葉は始めて聞いたと言う人があるかも知れない。一般の林業と完全に異なる分野であるから、研究所長は確固たる信念を持って職員の先頭に立って研究しなければいけないと思います。その点20余年在職して失敗ばかりした私は失格者だったと思います。樹芸研究所で一般林業と同じ研究をすれば、東京大学には千葉演習林がありますから存在価値がないと思います。これからの樹芸研究所の所長および職員の皆様の頑張りを期待します。